

日本史に対する興味・関心を高めるにはどうするか

—大河ドラマを切り口として—

丸山 仁

はじめに

「歴史は暗記することが多すぎて嫌いだ・覚えきれない」という生徒の「苦情」を耳にしたことがある地歴科・社会科の教員は多いと思われる。私もその一人である。私自身は小学校六年生の時に邪馬台国の謎に関心をもったことをきっかけに日本史に興味をもち、その後大学や大学院で歴史学を学び、いま日本史を高等学校で教えている。

日本史を教える教員の多くは、私のように何かをきっかけとして日本史に興味・関心をもち、学生時代に歴史学を学び、教壇に立っているのではないかと思う。しかし当たり前なことであるが、生徒は必ずしも日本史に興味・関心をもっているとは限らない。むしろ日本史に興味・関心をもつどころか、「歴史が嫌い」という生徒も少なくないのが現状ではないだろうか。

そのような中でどのように日本史に対する興味・関心を高めていくかは重要な課題の一つであるといえよう。映像

教材や実物（模型も含む）教材の提示は生徒の興味・関心をひくための工夫の一つであろう。本稿では、生徒自身が日本史を学ぶことは年号や歴史事象の暗記ではない、教科書記述の背景にある歴史の奥深さを知りたいという気持ちになってくれるための動機付けの一つの方法として、大河ドラマを取り上げた実践を紹介したい。

なぜ大河ドラマなのか。まずここ数年の大河ドラマでは、中高生にも人気がある若手俳優が出演していることがあげられる。歴史に興味をもつきっかけはなんであるかとまず興味・関心をもってもらうことが重要であろう。次に様々なメディアに取り上げられるため認知度が高いことがある。レンタルビデオ店では大河ドラマのコーナーをつくっているところもある。興味をもったとしてもそこから苦勞しなければ広げられないのではその興味・関心を広げたり、深めたりすることは難しいのではないだろうか。その点で関連書籍やテレビ（放映が終了した過年度のものはビデオやDVD）を通じてすぐに知識を深めることができる環境は魅力的である。

さらに授業をきっかけとして家族での展開が期待できることがある。家族内での日常的な話題となることで、例えば休日など大河ドラマの舞台を訪れるということにも発展する可能性もあるのではないだろうか。以上が大河ドラマを取り上げた理由である。⁽¹⁾ それでは、筆者がここ数年、折に触れて行ってきた実践を紹介してみたい。

一 日本史をどう学ぶか

まず大河ドラマそのものに入る前段として、歴史を学ぶ意味、学問としての日本史といった歴史の見方について生徒と一緒に考える機会を持つようになっている。教科書の記述（各人物や各歴史事項）の背景には何があるのかという視点で物事を考える発想を促すことで、深く掘り下げたり、多角的な視点で物事を考える力を養いたいと考えるから

である。その内容は次のようなものである。

(1) 歴史を学ぶ意味

そもそも私たちはなぜ歴史を学ぶのであろうか。網野善彦は、「勝者には決して知り難い、敗者のみの知る人間の真実を、できうる限りつかみとり、それを未来に生かす道をひらくことこそ、近代史学をこえる新しい歴史学のなすべきこと」と述べている。⁽²⁾ 歴史は決して過去におきた出来事だけではなく、過去から学び、現在、さらに未来に活かして行かなければならないものだ⁽³⁾と筆者も考えるし、その事を念頭において教壇に立っているつもりである。その際、自分はどの立場で歴史を語るのか。つまりその人の歴史観が問われているといえよう。また無自覚であったとしても少なからず自分の物の見方が授業での切り口や取り上げ方に影響するものであると感じている。

宮城学院高等学校に在籍する生徒はどのような歴史観をもっているのであろうか。筆者は「あなたにとって歴史とはなんですか」という問いを生徒に投げかけ、記述形式で解答を求めたことがある。

その解答は大きく分けて三つのパターンに分類することができると考えられる。「」の言葉は生徒自身の生の言葉である。

まず「人間そのものと同じ存在」、「人間の生きてきた足跡」といった人類の足跡としての捉えである。

次に「昔を学ぶことで、今必要なモノを見つけることができるもの」、「自分のためになるもの」、「過去を知って今に活かすもの」といった、過去のものではなく、いまにつながるものとしての捉えである。

最後に「なかったことにできないこと」、「同じ過ちを犯さないために学ばなければならないもの」、「これから生き

てゆくために学ばなければいけないこと」といったいわば教訓としての捉えである。

ここから読みとれる生徒の歴史観は決して「歴史は暗記科目」といったような浅いものではない。教師が十分に深みのある素材を提供することができれば、生徒はその力で深い学びをすることができるのではないだろうか。

(2) 歴史学とは何か

学問としての歴史学とは何か。生徒には、ひと言で表現するなら、史資料（≡根拠）にもとづいて論（≡考え）を組み立てることと提示した。しかしそれだけでは抽象的であるため、さらに次の四段階にわけられるとして説明した。⁽³⁾ 次の表の通りである。

歴史学の手順	内 容
①何を研究しようか	興味・関心＋これまでの研究↓オリジナリティー
②研究材料を集める	文字史料、発掘史料（モノ 考古学）、聞き取り調査、フィールドワーク（野外の実施調査）など
③研究材料を料理する	特殊技術（文書を読み解く）
④説得力を持つように構成する	全体を見る目と論理的な構成員力

学問というと高校生にはまだ無縁のもの、あるいは大学に進学してから学ぶ難しいものという意識が強く、必要以上に難しく感じてしまうところがある。しかし具体例を示しながら手順に分けて紹介することで少しは身近なものに感じてもらえるのではないだろうか。

(3) 教科書記述と歴史学との関係

教科書記述と学問としての歴史学との関係を鎌倉幕府の成立を例として考えた。

教科書(『新しい社会 歴史』東京書籍 五十・五十一頁)には鎌倉幕府の成立について次のように記述されている。

「(鎌倉幕府の始まり) 平氏の滅亡後、義経が頼朝と対立すると、頼朝は義経をとらえることを口実に朝廷に強くせまり、国ごとに守護を、荘園や公領ごとに地頭を置くことを認めさせ、鎌倉を本拠地に定め、鎌倉幕府を開いて武家政治を開始しました。さらに義経が奥州藤原氏のもとにのがれると、平泉を拠点として栄えていた藤原氏をも攻めほろぼしました。一一九二年、征夷大將軍に任じられた頼朝は、政治制度を整えました。それは簡素なものでした。將軍と武士とは主従関係によって結ばれ、將軍は配下の武士の先祖伝来の領地を保護し、新しい領地を与えました(御恩)。かれらは御家人として將軍に忠誠をちかい、奉公をしました。」

一方、歴史学では鎌倉幕府の成立についていくつかの説がある。⁽⁴⁾

日本史に対する興味・関心を高めるにはどうするか―大河ドラマを切り口として―

鎌倉幕府成立の画期	その内容・意義など
一一八〇年（治承四）	源頼朝による「東国」の荘園・公領の支配権の表明。 根拠：以仁王（後白河法皇二男）の令旨。 史料：『吾妻鏡』（治承四年八月一九日条「関東のこと施行のはじめなり」）
一一八五年（文治元）	守護・地頭の設置を認められる。幕府の支柱の成立。
一一九〇年（建久元）	頼朝が右近衛大将に任命される。 近衛大将を幕下と呼称。
一一九二年（建久三）	頼朝が征夷大将軍に任命される。 将軍の陣幕＝幕府。

鎌倉幕府とは何か。「幕府」を辞書的な意味から「将軍の陣幕」と考えるならば、鎌倉幕府の成立は源頼朝が征夷大将軍に任命された一一九二年となる。しかし鎌倉幕府を初めて誕生した武家政権と考えるならば、その成立の画期は多様となる。教科書の記述は、守護・地頭の設置を認められた一一八五年を鎌倉幕府の成立として考えているようである。大切な事は鎌倉幕府の成立は何年と覚えることではなく、その判断の基準は何であるかを考えることである。

（４）史料と資料と教科書のもとになるもの

教科書記述のもとになるものは大きくわけて史料と資料がある。その違いはなんであろうか。史料とは、同時代の

記録であり一次資料と呼ばれるものである。例えば、①古文書（『東大寺文書』など）、②古記録（『御堂関白記』など）、③考古学の遺物（埴輪など）、④絵画（絵巻・肖像画など）（『源氏物語絵巻』など）、⑤編纂物（『吾妻鏡』など）が具体例としてあげられる。なお文書と記録の違いは、文書は出した側と受け取った側が存在するもの（例えば手紙）であるのに対して、記録は日記などその記主が自分（あるいはイエ）のために書き残したものである。

一方、資料は、のちの時代に作られたものであり、二次資料と呼ばれるものである。例えば、①文学作品、②新聞、雑誌、④地名、⑤地域の習俗、⑥地形が具体例としてあげられる。

これも教科書記述の基となる根拠を考えるための具体的な提示として大切なことだと考えている。

（5）歴史の見方「中央」から「地域」へ・百年単位で考える

教科書の歴史記述はともすると「勝者」あるいは「中央」（例えば古代・中世における奈良や京都）からの視点で描かれることが多い。しかし最近では「地域」という視点が重視され、記述や歴史用語も見直しが行われ、多様な視点で歴史を考えることが大切にされてきている。そこで歴史用語として「奥州征伐」から「奥州合戦」と変化してきた理由を考えるなかで、「中央」・「勝者」の歴史ではなく、「地域」から歴史を考える視点を学ぶことを指摘した。

歴史用語	根拠と解釈など
「奥州征伐」	『吾妻鏡』にみえる文言
	『吾妻鏡』とは鎌倉幕府の編纂物。つまり勝った鎌倉幕府側がつけた呼び方Ⅱ「源頼朝が十二世紀末（一一八九年）、奥州平泉の藤原泰衡を滅ぼした出来事」という解釈
「奥州合戦」	薩摩の島津家の文書にみえる文言 つまり勝者でも敗者でもない第三者の呼び方Ⅱ「藤原泰衡が、源頼朝によって滅ぼされた出来事」

また歴史研究が個別化、細分化するなかでともすると歴史の大きな流れが捉えにくくなってきている。しかし個々の歴史的事実を理解するうえでも大きな流れというものを意識した上でその内容を押さえることが大切であることは言うまでもない。そこで歴史を短期ではなく長期的な視点に立って捉えると何が見えてくるかを考えた。次の表は百年単位で歴史上の出来事を並べたものである。

年号	事項	年号	事項
五九三年	聖徳太子が摂政になる	一四八五年	山城の国一揆
六九四年	藤原京に遷都	一四九二年	コロンブスのアメリカ大陸再発見
七九四年	平安京に遷都	一五八八年	刀狩令
八九四年	菅原道真の建言により遣唐使中止	一六八五年	生類憐れみに関する法令

九八八年	尾張国郡司百姓が国司の非法を訴える	一七八七年	寛政の改革
一〇八六年	院政開始	一七八九年	フランス革命
一一八九年	奥州合戦	一八八九年	大日本帝国憲法発布
一二八五年	霜月騒動	一九九一年	ペルシャ湾に海上自衛隊
一三九二年	南北朝合一		

「地域」の視点から歴史を考えたり、百年という長いスパンで歴史を見通すことによって様々な気づきが生まれるのではないだろうか。そのような気づきが歴史に対する興味・関心につながるものだと考えている。

以上紹介してきた(1)～(5)の取り組みを通して、いわゆる日常の教科書内容の学習だけではなかなか気が付きにくい、教科書の基となる学問としての歴史学や歴史の奥深さについて、考える機会をもたないかと考えている。

それではこれを前提として、次に大河ドラマを素材とした実践報告に入りたい。

二 もうひとつの鎌倉幕府、義経と奥州幕府構想

まず二〇〇五年に放映された「義経」を素材とした実践である。

この実践では、源義経の生涯を紹介するなかで、鎌倉幕府の成立という平氏政権にかわって登場した本格的な武士政権誕生の問題について考えてみた。⁵⁾

(1) 義経とはどのような人物か

まず源義経のイメージと実像の相違について指摘した。主人公である義経の意外性を指摘することで興味・関心をもつきっかけを作ろうとしたのである。

源義経の一般的なイメージは、悲劇のヒーロー、判官びいき、牛若丸と弁慶、チンギス・ハン伝説などがあげられるであろう。しかし実際は、色白の小男で、反った歯の持ち主であった。⁶⁾それが室町時代に入ると『義経記』などに義経の美貌が強調されるようになり、現代の義経イメージの基となっていたのであった。

次に義経の経歴を紹介した。義経の生涯を概観することでどのような人物であったか、その大枠をつかみ、人物像を共有することを意図した。

年 号	事 柄	へ 年齢
平治元年 (一一五九)	誕生 (へ1)	
永暦元年 (一一六〇)	父義朝、尾張国で殺される	
嘉応元年 (一一六九)	義経、鞍馬寺に入る? (へ11)	
承安四年 (一一七四)	義経、奥州に下る? (へ16)	
治承四年 (一一八〇)	義経、駿河国黄瀬川の宿で頼朝と対面 (へ22)	
元暦元年 (一一八四)	義経、範頼とともに平氏追討に向かう	
文治元年 (一一八五)	左衛門尉に任じられ、「使」(＝検非違使)の宣旨を蒙る 屋島の戦い (二月二十九日)	

文治元年（一一八五）

壇ノ浦の戦い（三月二十四日）

相模国酒匂に到着。頼朝、北条時政を遣わし、義経の鎌倉入りを禁ず（五月十五日）

腰越から大江広元に書状を送り、心情を訴える。腰越状（五月二十四日）

義経、参院し、頼朝追討宣旨を請う（十月十六日）

義経、頼朝追討宣旨を下されるも、応じるものなし（十月二十二日）

文治二年（一一八六）

義経、「義行」と改名される（五月十日）

文治三年（一一八七）

義経、さらに「義頭」と改名される（十一月二十四日）

文治五年（一一八九）

義経、山伏姿で、伊勢・美濃を経て、奥州に下るといふ（二月十日）

義経、衣河館にて妻子と自害（31）

（2）義経をめぐる七不思議

義経の人物像と略歴をみたうえで、今度はどのように義経の人物像をふくらませるが課題となると考えた。その手段として、義経にまつわるエピソードを「七不思議」として取り上げ紹介した。

〈義経の七不思議〉

不思議その1：義経と静御前との出会いはいつか？

① 出会いは元暦元年（一一八四）十月十一日に義経が院の昇殿を許されて以降。

② 静御前の職業は白拍子。白拍子とはいまの「タカラジェンヌ」。

日本史に対する興味・関心を高めるにはどうするか―大河ドラマを切り口として―

日本史に対する興味・関心を高めるにはどうするか―大河ドラマを切り口として―

③相関図：義経―後白河法皇―藤原通憲（『信西』）―磯禪師（静御前の母）

不思議その2：判官とはいったい何のこと？

①義経がついた官職は「左衛門尉」検非違使。そこから「判官殿」（『吾妻鏡』元暦元年十二月三日条）という呼称が義経の代名詞となった。

②判官びいきの背景には、「不遇な一生」と「流浪（『自由』）」がある。

不思議その3：弁慶とはどんな人物だったのか？

①実在の人物である。『吾妻鏡』文治元年十一月三日条に「弁慶」とみられる。

②義経に従った人の中で最後に登場し、それほど地位は高くない。文武両道に秀でていた。

③活躍が描かれるようになるのは『義経記』（卷三・七）においてである。
不思議その4：義経の乗った馬はどんな馬か？⁽⁷⁾

①一の谷合戦の鴨越での「坂落し」のエピソード

②実は大きさはポニー程度（体長一〇九cm〜一四〇cm）

鎌倉市の材木座遺跡出土の軍馬の骨

不思議その5：なぜ義経と頼朝は対立したのか？

①兄弟は最大のライバル。足利尊氏と直義。伊達政宗と弟

不思議その6：義経⇄義行⇄義顕？

①文治二年（一一八六）義経から義顕に改名させられる。その背景には文治元年（一一八五）義経追討宣旨が

出るも捕まらなかったため、あらわれるという意味をもつ「顕」を用いた。

不思議その7：義経はチンギス・ハンであるという義経伝説は本当か？

①義経伝説とは、義経は奥州平泉で亡くなったのではなく、北に落ちのび、蝦夷地（＝北海道）に渡り、ユーラシア大陸にわたって、チンギス・ハンとなった、というもの。

②真偽はどうかというと、もちろんいわゆる義経伝説は偽である。しかし偽であるから意味がないと考えるのではなく、義経伝説から何を読みとるかを考えるべきである。義経伝説は幕末以降の近代に形成された。鳴滝塾を開いたシーボルトが大陸に義経を祀った祠があることを伝えたことが義経伝説のきっかけとなったと考えられている。近代に形成された要因としては、日本の対外意識の高揚、明治の富国強兵政策がある。

「七不思議」という形式をとった理由は、知りたいという意識を高めることにあった。さらに個々人の興味・関心は多様であるから、どれか一つでも二つでも心に引かかせるものがあれば良いということから出来るだけ多くのエピソードを紹介したわけである。

(3) いくつかの幕府の可能性と義経

平安時代から鎌倉時代という時代の変遷は、現代に生きる私たちにとっては自明のことである。しかし同時代を生きていた人の感覚はもちろんそうではない。つまり初めから鎌倉幕府の成立が予定されていたわけではなく、源頼朝がライバル達を倒し、勝ち取って成立したのが鎌倉幕府という認識である。

平泉藤原氏は、平泉（岩手県平泉町）を本拠地として、清衡（初代）・基衡（二代）・秀衡（三代）と継承していった武士団である。源義経は三代秀衡のもとに身を寄せることになった。その秀衡が亡くなる時、遺言として「伊予守義頭をもって、大將軍として、国務せしむべし」という遺言を遺していることから、義経を首班とするもうひとつの幕府構想があったことが指摘されている。

頼朝のライバル達とは、源平の貴公子を推戴した地域権力であり、①源（木曾）義仲（長野県）、②志田三郎義弘（茨城県）、③新田義重（群馬県）※ 新田義貞の祖、④千葉介常胤（千葉県）、⑤上総介広常（千葉県）、⑥藤原秀衡・源義経（岩手県平泉）がその地域権力であった。

はじめから源頼朝が鎌倉幕府を開く事が決まっていたわけではない。頼朝をはじめとする様々な地域の武士勢力のなかで、争いがおこり、最後に勝利したのが源頼朝であった。そのような見方を最後に紹介した。

（4）小括

源義経という一人の人物に焦点をあて、その人物像を掘り下げることで教科書に出てくる様々な人物・出来事には豊かな歴史があることを感じ取ってもらうことが一つの狙いであった。さらに源義経は貴族中心の社会から平氏政権を経て、武家が本格的に政治の実権を握り始める鎌倉幕府の登場という大きな転換点にあたる時代を生きた人物であり、その時代を具体的に認識することにつながる素材となると考えられる。

三 織田信長と山内一豊

次に二〇〇六年に放映された「功名が辻」（山内一豊と千代夫婦を中心とする物語）を素材とした実践である。⁽⁸⁾この実践では、山内一豊の生きた時代とはどのような時代であったか、馬揃えという具体的なエピソードを紹介しながら、史実と大河ドラマの関係について考えてみた。さらに織田信長が暗殺された本能寺の変の犯人探しを通して歴史学の最近の研究成果を紹介し、興味・関心を高めるように工夫した。

(1) 馬揃えのエピソードは史実か

まずあまり知名度としては高くない山内一豊と千代を系図や肖像画や略年表をもとに紹介し、人物像をつかんでもらった。さらに一豊は、天下を目指して覇権を争った織田信長・豊臣秀吉・徳川家康に間接的あるいは直接的に仕えた人物、織豊期、江戸時代初期を生きた人物であるという時代認識をもってもらうため、信長・秀吉・家康三人の肖像画を提示した。

その上で「馬揃えのエピソード」に着目した。具体的な一つのエピソードに着目することで、山内一豊と千代の人物像に迫りながら、歴史学と大河ドラマの関係について考えてみたかったからである。

「馬揃えのエピソード」のもとになっている史料は『藩翰譜』である。『藩翰譜』には、千代は一豊に馬を購入するようにすすめ、馬揃えにおいて、織田信長によってその馬が褒められたことが記されている。しかし『藩翰譜』は同時代史料ではなく、一六〇〇年（慶長五）から一六八〇年（延宝八）までの間に徳川將軍家に仕えた大名家の系譜と

歴代の伝記の集成であり、著者は新井白石である。つまり史料としては二次資料である。

そこで一次資料である『信長公記』に着目する。『信長公記』は、太田牛一が自身の日記に基づいて記録した織田信長の軍記である。『信長公記』には、千代が馬の購入をすすめたとされる時期に、山内一豊の名前はみられない。また一五八一年（天正九）の馬揃えにおいても同様である。そこから読みとれることは、「馬揃えのエピソード」の時期（一五八一年）に一豊は信長の目にとまるような人物ではなかったことである。そもそも一豊は、信長ではなく秀吉直属の家臣であった。この時期、一豊は、秀吉と共に因幡・美作に出陣中と考えられている。

では『藩翰譜』の「馬揃えのエピソード」から何を史実として読みとるべきなのか。

『藩翰譜』には、「天下に信長の家でなくては買える者はいないだろうと、はるばる奥州から引いてきたのに、空しく帰したならば無念至極だろう。山内は久しく浪人をして、家もさぞ負しいだろうに、買ったのは見上げたことである。信長の家の恥をすすぎ、また武士の嗜みを心得ている」と信長が褒めたと記されている。『藩翰譜』は二次資料であるから虚構であるとして切り捨てるのではなく、その記述から信長は馬好きであること、馬揃えのためでないにしても、「武士の嗜み」として名馬を求めることは一般的であることは史実として読みとれるのである。そうした史料読解の方法を生徒達と共に考える中で、教科書の記述が一つ一つの史実に基づいていることを生徒達に気づかせるところにつなげることができないのではないだろうか。

（2）信長を殺した犯人は誰か

次に山内一豊と千代にとっても転換点となった本能寺の変（一五八二年）について、その犯人は誰かという謎解き

をするなかで、歴史学の研究成果を紹介した。

まず本能寺の変で織田信長を殺したのは誰かという問いかけをした。その問いかけに対する答えは十中八九明智光秀である。そこで確かに織田信長を討ったのは光秀であるが、彼の単独犯ではなかったと考えられているという研究段階を紹介する。では彼の共犯、ないし光秀を背後で扇動していた人物・組織は誰なのかということになるが、次の三つの説を紹介した。

A 足利義昭説

根拠：①愛宕百韻における光秀の発句は「ときは今、天か下しる五月哉」である。

その解釈は、かつては「時は今、土岐氏の一族である光秀が天下を取るべき五月である」という光秀の野望を読みとれると考えられていたが、今は、「時は今、天皇が天下を支配する五月かな」と解釈するようになったこと。

②本能寺の変以後の足利義昭の書状（一五八二年六月一三日付）の文面から足利義昭が首謀者と読みとれること。

B イエズス会説⁽⁹⁾

根拠：①ルイス・フロイスの見方。信長が本能寺の変で討たれたのは「デウスよりの優越」（＝自ら神になろうとした傲慢さ）。「デウスが信長の命の終了日を決定した」（＝パテレンが信長の死を決定した）。

C 内部崩壊説⁽¹⁰⁾

根拠：①極端なまでに信長個人に権力を集中しようとする独裁体質は、その枠組みが他の大名などに拒否反

応をもたらしたというだけでなく、信長権力の中でも無理を生じていた。世の中は「乱れた」のではなく変化したのであり、政治的な再統一がなくなるとも、社会自体の力によって、おのずと新しい社会の枠組みは形成されつつあった。

本能寺の変の犯人は明智光秀であるといういわば生徒にとつての「常識」を覆すことで、知りたいという探求心に火をつけることができるのではないだろうか。さらに歴史の奥深さを実感することにつながったのではないかと考えている。

(3) 小括

「馬揃えのエピソード」という一つの場面を取り上げ、その根拠を探るなかで、歴史を描く基になっているものについて考えた。そこから史実と大河ドラマの間にあるものについて考えることができたのではないだろうか。また歴史上最も有名な人物といっても過言ではない織田信長、彼が殺された本能寺の変の謎を取り上げる中で謎解きの面白さを感じ、必ずしも全てが自明の事ではなく、着眼点や異なる史料に着目することで多様な解釈が生まれるものであることを感じることもできたのではないかと考えている。

四 『風林火山』からみた戦国時代

最後に二〇〇七年に放映された「風林火山」(武田信玄の参謀山本勘助を主人公とした物語)を素材とした実践である。¹⁾この実践では、まず武田信玄や山本勘助の人物像にせまり、次に武田信玄と好敵手上杉謙信が戦った川中島の

戦いに着目し、最後に信玄が亡くなった後、武田家の滅亡を決定つけた長篠の戦いに注目することで、戦国時代とは日本の歴史のなかでどのような時代であったのかを考えた。

(1) 武田信玄と山本勘助

まず武田信玄の画像と略歴を紹介した。そのうえで信玄の特徴を「信玄のココがすごい！ベスト三」と題して取り上げた。情報過多にならないように三つに絞って提示することにした。なお治水技術を第一位としたのは、戦国時代だけでなく現在も信玄堤は洪水防止に大きな力を果たしているからである。

〈武田信玄の略歴〉

年号	事項	年齢
一五二一年(大永元)	十一月三日 甲斐国で誕生。幼名太郎	
一五三六年(天文二)	元服して「晴信」と名乗る。初陣で勝利。	十六歳
一五四一年(天文十)	父信虎を追放し、家督を相続する。	二十一歳
一五五八年(永禄二)	出家して「信玄」と名乗る	三十八歳
一五七三年(元亀四)	四月十二日 没	五十三歳

〈信玄のココがすごい！ ベスト三〉

第三位：家督を継いでから、一度も甲斐本国に攻め込まれたことがない。

甲斐（山梨県）と信濃（長野県の一部）↓信濃全域から上野（群馬県）、駿河・遠江（静岡県）、三河（愛知県）、美濃（岐阜県）へと拡大。

第二位：「甲州法度之次第」（二十六条、のち五十七条 ※現在の憲法のようなもの）の制定。

信玄自身も法に従う（「もし信玄自ら法に違反したときは、身分の高い低いにかかわらず訴えなさい。場合によっては、晴信自身も処罰を受ける覚悟がある」）。

第一位：高度な治水技術をもつ。「水を制する者は天下を制する」。信玄堤。

次ぎに山本勘助についても信玄と同様に略歴と三つの特徴を紹介した。山本勘助の存在は不明なことが多く、基本的な人物像を把握することを心がけた。

〈山本勘助の略歴〉

年 号	事 項
一四九三年（明応二） 一五四三年（天文十二）	駿河（静岡県）あるいは三河（愛知県）で誕生 このころ信玄に仕える
	五十一歳

一五五七年（弘治三） 一五六一年（永禄四）	第三回 川中島の戦いに参戦 第四回 川中島の戦いで討ち死	六十九歳
--------------------------	---------------------------------	------

〈山本勘助の三つのなぞ〉

その一：「軍師」ではなく、剣術の名人・戦略家（『兵法仁』）。

その二：独眼で、足が不自由。

その三：実在そのものが疑われていた人物。

唯一の同時代史料。「山本菅助」（市川文書） Ⅱ 山本勘助

(2) 第四回川中島の戦い

武田信玄や山本勘助が生涯に渡って戦い続けたのが越後の戦国大名上杉謙信である。

武田信玄と上杉謙信は、北信濃の川中島地方で計五回戦った。いわゆる川中島の戦いである。

〈川中島の戦い〉

第一回	一五五三年（天文二十二）	武田・上杉両軍接近するが主力決戦なし
第二回	一五五五年（弘治元）	約二百日対陣するが決着つかず
第三回	一五五七年（弘治三）	小規模な合戦

日本史に対する興味・関心を高めるにはどうするか―大河ドラマを切り口として―

第四回	一五六一年（永祿四）	最大の激戦・武田方の勝利
第五回	一五六四年（永祿七）	決着つかず

最も激しかった戦いは第四回であった。第四回川中島の戦いは、武田方の勝利で終わったが、特に信玄と謙信の一騎打ちのエピソードが有名である。山本勘助もこの戦いで戦死した。そこで第四回の戦いの経過を再現した。

〈第四回川中島の戦いの経過〉

月 日	事項など
八月 十五日	上杉謙信、善光寺に到着 軍勢一万三〇〇〇人
十六日	上杉謙信、妻女山に陣をしく
二十四日	武田信玄、雨宮渡を封鎖（＝上杉軍の補給や本国との連絡を遮断）
二十九日	武田信玄、海津城に入る。軍勢二万人
九月 九日	武田信玄、「啄木鳥戦法」を採用。一隊は翌朝に妻女山を夜襲、信玄本隊は川中島の八幡原に布陣し、上杉軍を挟み撃ちにするという作戦。
	山本勘助の進言「味方の二万の軍勢のうち、一万二千を割いて、妻女山に向かわせ、明朝六時より攻撃を開始する。そうすれば上杉軍は負けても勝っても山を降り、千曲川を越えて川中島方面に退くであろう。そこで信玄本隊八千の兵を上杉軍の退路に先まわりして待ち伏せさせ、前後からはさみ討ちすれば勝利まちなし」

九月 九日

しかし上杉軍は武田軍の動きを見抜き、夜のうちに妻女山を下り、雨宮渡で河を渡り、八幡原の武田本隊に向けて行動を開始。

十日

午前八時ころ、川中島で戦闘開始。

武田軍苦戦：武田信繁（弟）・両角虎光（老臣八十一歳）ら戦死

信玄と謙信の一騎打ち

「信玄を討ち取ろうとしていた謙信は、十二騎の武士を従え、武田軍の陣地を突破し、信玄の身辺に殺到した。謙信は一騎で信玄に迫り、「お前、ここに居たか」と大声をあげて斬りかかった。信玄は床几に腰をかけたまま、「さがれ」と叫び、軍配うちわをあげて、謙信の太刀を受けとめた。謙信は二の太刀、三の太刀まで斬りさげた。軍配は裂け、二の太刀が信玄の肩を傷つけた」

午前十時ころ、武田軍別働隊が川中島に合流。上杉軍は前後より武田軍の攻撃にあって善光寺に撤退（＝武田方の勝利。謙信は武田領に攻め入りながら領地を奪うことができなかったため）

午後四時ころ、信玄が追撃する全軍を八幡原に撤収。

死者は武田軍四〇〇〇人余、上杉軍三〇〇〇人余であった。

この戦いからさまざまなものを引き出すことができるであろう。しかし今回は、信玄と謙信の一騎打ちの具体的な様子、さらに武田方の勝利に終わったことを強調して、次の「異説」を投げかける前段とした。

(3) もうひとつの川中島合戦

ところが第四回川中島の戦い武田信玄ではなく、上杉謙信の勝利として描いた紀州本「川中島合戦図屏風」が存在する。⁽¹²⁾ 紀州本「川中島合戦図屏風」には川の中に馬を乗り入れ、ともに太刀を抜き払って斬り結ぶ謙信と信玄が描かれている。もうひとつの信玄と謙信の一騎打ちである。そのように描かれた背景には「川中島五箇度合戦記」の「謙信川中へ乗込み、晴信（信玄）を二太刀切付け申さる、信玄も太刀を抜き、合戦申さる所に」という記述の存在があることが指摘されている。

さらに紀州本「川中島合戦図屏風」作成事情には、徳川頼宣は、宇佐見勝興・定祐父子を登用し、越後流を紀州徳川家の軍学と定めた（幕府は甲州流軍学）ことがあったと指摘されている。つまり幕府の甲州流軍学に対抗するために、越後流軍学が必要であったということである。そして山本勘助に匹敵する軍略家としての宇佐見定行、川中島合戦での上杉の勝利が必要であった、ということであった。

史実とは異なる歴史が描かれる背景には何があるのか。これも歴史の見方を考える一つのポイントではないかと考えている。

(4) 長篠の戦いの意義

長篠の戦いとは、一五七五年（天正三）五月二十一日に織田信長、徳川家康の連合軍が武田勝頼の軍を三河の設楽原（現在の愛知県新城市）で破った合戦である。武田最強の騎馬隊が織田信長率いる足軽鉄砲隊に敗北したことから、戦いの戦法が騎馬戦から鉄砲へ変わったことが注目されている。

しかしそれだけでなく、長篠の戦い前後で時代が動くことに着目させたい。具体的には室町幕府の枠組みから「天下」という新たな枠組みへ世の中が変わっていったということである。

人 物	内 容
武田信玄の意識	「室町幕府」のために戦う。元服の際に室町幕府十二代將軍足利義晴から一字をもらい「晴信」
織田信長の意識	「天下」のために戦う 室町幕府將軍足利義昭の拳兵を「公儀御謀反」と呼び、天下の安定（「天下静謐」）のために將軍を追放。

長篠の戦いという一つの出来事に注目し、その意義を考えるなかで、それが大きな時代の変遷につながるのであればそこに着目させることは大切である。歴史は断片的なものとしてのみ捉えるのではなく、一連の大きな流れのなかで考えることは現代から歴史を見つめることができる故に為し得ることではないだろうか。

(5) 小括

武田信玄、山本勘助、川中島の戦い、長篠の戦いというものに着目するなかで、最後には戦国時代とはどのような時代かという時代観に至った。戦国時代とは、室町幕府のもとに、武田信玄や上杉謙信といった戦国大名が、自分の支配域（＝領国）を必死に守り、さらに拡大をはかっていた時代であった。やがて戦国大名の意識は天下統一へと向

かい、織田信長の「天下静謐」、豊臣秀吉の「物無事令」を経て、徳川家康の江戸幕府に結実するのである。

むすびにかえて

どうしたら生徒の日本史に対する興味・関心を高めていくことができるか。

本稿では大河ドラマを素材とした実践を紹介してきた。筆者としては、教科書記述に沿った日常の学習から離れ、歴史の奥深さや面白さの一端を感じるきっかけとなったのではないかと考えている。その是非は読者諸賢に委ねるところとしたい。

本稿で紹介した本能寺の変の謎について話した時、ある生徒が「毎回このような授業だったら面白いのに」と言葉ももらしたことがあった。嬉しかった反面、教科書の内容を教える日常の授業でいかに生徒の興味・関心を引き出していないかを反省させられた出来事でもあった。今後も大河ドラマを素材とした実践を継続し、更に生徒の興味・関心を高めるためにどのような工夫が出来るのかを追求していきたい。

〈注〉

- (1) 授業時間内で歴史の奥深さ、面白さを十分に紹介することはほぼ不可能であろう。受験科目として教科書の事項を学ぶことはやはり授業の大切な目的の一つである。したがって、授業では日本史に興味を持つきっかけや動機付けを行い、その先は個々人の自主的な活動に負う所が大きいと考えている。

- (2) 網野善彦「敗者のみ知る人間の真実をつかみとろう」(アエラムック10『歴史学がわかる』朝日新聞社、一九九五年)

- (3) 深谷克己「歴史のあたらしい顔を発見する」(アエラムック『日本史がわかる』朝日新聞社、二〇〇〇年)
- (4) 入間田宣夫「鎌倉幕府はいつ、いかにして成立したか」(『中世武士団の自己認識』三弥井選書、一九九八年)
- (5) この実践を準備するにあたって参考にした文献は次のものである。『義経 史実と伝説をめぐる旅』(NHK出版、二〇〇四年)、上横手雅敬編『源義経 流浪の勇者 京都・鎌倉・平泉』(文英堂、二〇〇四年)、五味文彦『源義経』(岩波新書、二〇〇四年)
- (6) 『延慶本平家物語』に「色白男の長低きは、向齒の殊に指し出でて」とある。最古の義経像「中尊寺蔵の画像」も合わせて提示した。
- (7) 川合康『源平合戦の虚像を剥ぐ』(講談社メチエ72、一九九六年)
- (8) この実践を準備するにあたって参考にした文献は次のものである。ARISAWA KEN・大塚洋一郎『マンガで読む山内一豊&千代』(学研、二〇〇六年)、田端泰子『山内一豊と千代―戦国武士の家族像―』(岩波新書、二〇〇五年)
- (9) 立花京子『信長と十字架―「天下布武」の真実を追う』(集英社新書、二〇〇四年)、フロイス(松田毅一・川崎桃太訳)『日本史 5』(中央公論社、一九七八年)
- (10) 小島道裕『信長とは何か』(講談社メチエ、二〇〇六年)
- (11) この実践を準備するにあたって参考にした文献は次のものである。平山優『武田信玄』(吉川弘文館、二〇〇六年)、平山優『山本勘助』(講談社現代新書、二〇〇六年)、NHK大河ドラマ歴史ハンドブック『風林火山』(NHK出版、二〇〇七年)、高橋修『もうひとつの川中島合戦』(洋泉社、二〇〇七年)、『川中島合戦図長篠合戦図』(中央公論社、一九八八年)、『よみがえる上杉文化―上杉謙信とその時代―』(新潟県立歴史博物館、二〇〇一年)
- (12) 高橋修『もうひとつの川中島合戦』(洋泉社、二〇〇七年)